

初代呂太夫、初代七五三太夫、路太夫、二代目南部太夫初代源太夫、東京にて亡くなりし駒太夫其他多數の太夫を弾きしも其名を略す。中に就て尤も其奇縁に感ずるは、現今の櫓下古靱太夫、翁は二十七歳、太夫は十三歳の時、大阪北新地裏町寄席にて其初舞臺を躍けり。施檀二葉の譬に洩れず、此時既に太夫の美音、節廻しの旨さに聴衆を感嘆せしめたりしが、其初舞臺を弾きし翁が、太夫の櫓下時代に再び文樂に復歸せること也。

以上、要するに翁は多能俊才仁俠の氣を負ひ、容易に人に下らず、其最も無二の親友は故常陸山の如き、伊藤仁太郎の如き孰れも常人に非ず。古人曰く、交る友を見て其人品を知ると、亦以て翁の人となりを推知すべし。更に斯界の大御所、故杉山茂丸先生と親交あり、先生晩年翁に遺囑して曰く、余一生を通じて義太夫界の爲に周旋最も努めた（觀西翁曰く、先生斯界に盡されし力を以て國家に廻向せば、早々臺閣に列せられしものを、と先生笑つて之を頷す）爾れど斯界の衰運、挽回容易ならず、子乞ふ之を昂めよと、太夫養成に遺憾の意を表しつゝ世を去りぬ。幸に先生尤も愛顧せる意中の人、古靱太夫出生、文樂三業養成に努力せらる、先生亦以て笑を舞臺に含まん。觀西翁、杉山先生の遺志の世に顯はれざらん事を憂へらるゝを以て爰に

附記す。

此外每友の木村政次郎、中村啓次郎氏の如き幾多の知人と交遊上の逸話あれども今は略しぬ。

香伯會 堂野前種松稿

## 野澤吉左 野澤松之輔と改名

文樂座三味線の中堅、野澤吉左は今回野澤松之輔と改名此十月文樂座の盆替り興行で披露をする。

吉左改め初代松之輔は和歌山の産、幼少の頃故野澤吉造師の手ほどきで斯道に入り、昭和五年十月故六代目野澤吉兵衛師入門、野澤吉左と名乗る。翌昭和六年正月文樂座に入座初舞臺を勤め、六代目歿後は先頃故人となつた七代目吉兵衛師の預り門人として今日まで文樂座に出動してゐるが、數年前より淨曲の作詞作曲に趣味をもち「西亭」のネームで既に十數篇の新作を發表、文樂座に上演、古典の殿堂に清新異彩の舞臺を見せて好評を博し、本職の三絃より、寧ろ作家として文樂座の寵兒と云はれてゐる。其重なる作詞作曲を擧げると

豆 ま き 昭和一五、二月（文樂座上演）  
 戰 陣 訓 同 一六、三月（同）  
 里けしき双草紙 同 一六、四月（同）  
 海國日本魂 同 一六、五月（同）  
 國威は振ふ 同 一七、二月（同）  
 水漬く屍 同 一七、四月（同）  
 義士 櫻 同 一七、五月（同）

作曲並に脚色

忠 靈 同 一七、三月（同）  
 由 夏 湊 同 一七、六月（同）  
 土屋主税 同 一七、九月（同）  
 出 陣 同 一七、二月（同）

外に作曲として

新作野崎村 （食満南北氏作 大阪中座公演） 中村翫雀襲名興行

忠 靈 （瀧川春郎氏作 角座及南座） 市川小太夫初演

お七と吉三 （大阪大劇） 中村芳子主演

其他舞踊小篇物二三がある。

尙、今回改名した松之輔名蹟は野澤家先代に嘗て無い名

で、今回が初代となるわけであるが、名づけ親は白井松竹會長で、昨年戰陣訓を作曲發表した當時、自から名頭をとつて松之輔と命名して與へ、今回の改名となつたものである。

改名の舞臺は自ら作詞作曲した「出陣」の短篇二景で榎茂部陸平振付、呂太夫、織太夫、南部太夫、文太夫、雛太夫、つばめ太夫、文字太夫、三味線は松之輔、重造、團六、吉季、清友、一郎右衛門、仙糸、道八等が出陣する。